

2019～2022 年度 国際ロータリーのテーマ

ロータリーは世界をつなぐ



マーク・ダニエル・マローニー

大島 浩輔

2019～2020 年度
国際ロータリー会長

2019～2020 年度
第 2670 地区ガバナー

小松島ロータリークラブ

例会日 毎週金曜日 [12:30～13:30]

例会場 菊寿殿 おがわ 小松島市小松島町字外開 7-1

TEL:0885-32-0205

事務局 小松島市金磯町 10-19 TEL:0885-33-1211

2020 年 5 月 22 日 第 3354 回 例会記録

会員総数	24 名
出席会員	18 名
本日出席率	79.2 %
前回出席率	75.0 %

会長報告 (木村 幹男) ・小松島市では、昨日“特別定額給付金”の申請書送られてきました。どう使うのか…
財団・米山への寄付もあります。
息子の話では、これで電化製品を買いたいという人もいます。

幹事報告 (芝 敏廣) ・港まつりが中止との連絡と、小松島南 RC の月報が届いています。

委員会報告 特になし

卓 話 芝幹事 “人の話を聞く大切さ：中国の故事成句から”



“項羽と劉邦”の性格や生き方等から、現代にも通じる真理に迫る卓話でした。

●**時代背景**：“秦”が紀元前 221 年に史上初めての中国統一を成し遂げた。秦王政は、自らの偉業を称え、王を超える称号として皇帝を用い、自ら始皇帝と名乗った。始皇帝は、法家の李斯を登用し中央集権化を推し進めた。中央から派遣した役人が全国の各地方を支配する郡県制を施行し、文字・貨幣・度量衡の統一も行った。さらに、当時モンゴル高原に勢力をもっていた遊牧民族の匈奴を防ぐために万里の長城を建設させ、軍隊を派遣して匈奴の南下を抑えた。嶺南地方(現在の広東省)にも軍を派遣し、この地方にいた百越諸族を制圧した。しかし、このような中央集権化や土木事業・軍事作戦は人々に多大な負担を与えたため、紀元前 210 年に始皇帝が死ぬと、翌年には陳勝・呉広の乱(農民反乱)がおき、これに刺激され各地で反乱が続き、秦は紀元前 206 年に滅びた。

●**楚漢戦争**：秦が滅びたあと、“項羽”と“劉邦”が覇権をめぐる争った(楚漢戦争)で、紀元前 202 年に、劉邦が項羽を破り、漢の皇帝となった。

●**項羽**：楚の名族・項氏の出身。楚随一の名将の項燕將軍の孫だが、幼少期に楚が秦に滅ぼされ、叔父の項梁とともに流浪の身となった。始皇帝の死後、叔父に従い楚を再興して天下の動乱に身を投じ、項梁の死後は楚軍の頭目となって、全反乱軍を率いて秦を倒した。秦滅亡後は「西楚霸王」を名乗って天下の盟主となるもののやがて反旗を翻した劉邦の漢軍との間で果てしない戦いを繰り返すこととなる。矮小な体躯の多い江南人には珍しく、身の丈 8 尺を超える大男。力も鼎を持ち上げるほどに強く、さらに戦場で敵を見れば虎のように襲いかかるその剽悍さは「猛如虎」と評され敵味方を問わずに恐れられた。気性は荒くとも臭うような愛嬌があって頭脳の回転も早く、その人柄は肉体の雄偉さと相まって人を惹きつける強い魅力になっている。しかし並外れて感情量の多い激情家で、自らの血族を篤く保護して部下を可愛がり血族の長者には懇篤な礼をもって遇するなど身内には過分なほどの温情をかける一方、邪魔者は蟻を潰すように殺すことも厭わずない。自分に叛くものは決して容赦をせず、一人謀叛者が出土地は女子供すら逃さず全てを虐殺するといった具合で凶行を繰り返す。20 万人もの秦軍の降兵を谷底に叩き落としてことごとく坑埋めにするという凄まじい行状も平然とやってくる残忍さと冷酷さを持っている。体内で無尽蔵に作られる生気が常にのたうち回って戦場で敵を殲滅する以外に捌け口がないといった気性の持ち主で、その激しすぎる気性は戦場で無類の剽悍さを発揮させる反面、自身に政略や戦略の感覚を大きく損わせる弊害を招いた。その武勇で楚漢戦争を通して劉邦の漢軍を圧倒し続ける

が、敵対者は残らず殺し尽くすというあまりの苛烈さは、楚から民心を遠ざける結果を招くこととなった。しだいに諸侯もその足下を離れて秦の滅亡時に天下を覆わんばかりだったその軍容は徐々に数を減らし、ついには配下の楚軍の将兵にまで離反され、追いつめられた末に自ら首を刎ねて死んだ。享年31。その遺骸は劉邦によって黄金千枚と一万戸の封地という懸賞金がかけており、項羽が自害するや漢兵がむらがって五分され、遺骸の破片を持ち帰った兵はそれぞれ褒章を受け列侯された。*凄まじい才能を持ちながら人間的に未熟な部分が多く、最終的に劉邦に敗れてしまったが、その波瀾万丈な人生は後世の人を惹き付けてやまない。

●“劉邦”：項羽より16歳年上で、沛の草深い田舎邑・豊の出身。若年の頃より無頼漢の中で生活し、やがてごろつき連中の親玉となって盗賊働きをするなど悪事を繰り返し、近隣の鼻つまみ者として疎まれていた。しかし、接する誰をも懐に引き込んでしまう不思議な魅力を持ち、その余人にない人望を見込まれて始皇帝の死後各地で反乱が頻発する中で、沛のまとめ役として推戴されて沛公となる。その後反乱の一大勢力となっていた楚軍の下に身を寄せて幕下の一将として滅秦戦に参加するものの、戦後僻地の漢の王に封ぜられたことから項羽と対立し、勇猛並び立つ者のない項羽と天下の覇権を争うこととなる。文盲に近いほど無学で何の取り柄もない男だが、どこか「放っておけない」と思わせる可愛げがあり、周囲の人間に労を惜しむことなくこの頭目を補佐しなければならないと思わせてしまう魅力を備えている。無作法でまるで礼節を知らぬが長大な体躯と雄魁な容貌に恵まれ、所作さえ整えさせれば誰もが眼を見張るような容儀を振る舞うことができる。殊に竜に似た面長で美髯を生やしたその特異な面貌は当時流行していた人相見をも驚かせて「竜顔」と称えられ、その呼び名は後代には中華皇帝の玉顔の総称となった。理屈の多い儒家を好まず、法の網で雁字搦めに世を縛ろうとする秦の官僚のような法家も好まず、戦国末期の魏の公子・信陵君に憧れ、君のような大俠の風韻を湛えた俠たらんことを欲している。戦下手だが他の王侯のように後方で隠れて士卒だけを前線で戦わせるということがなく、どんな戦いでも身を陣頭に晒して自ら叱咤して指揮を取る戦いぶりが多くの兵の心を惹きつけた。また狭量な自尊心や妬心を微塵も持たず、自身の至らぬ点は素直に認めて能臣に一任し、己は一個の「虚」として頂上に寝転ぶといった具合で全軍の上に立ち位置を定め、結果として幕下の者はこの空虚を埋めようと懸命に動き回ることとなり、そのことが軍全体にいきいきとした活力を与えるという奇妙な好作用を生むこととなった。無類の寛容さと気前の良さというその美質は無能さを補って余りあるほどのものがあり、戦が芳しく進まずとも劉邦の軍勢は常に明るく、そこだけ陽が照っているような不思議な陽気さを湛え続けた。楚漢戦争を通して常に楚軍の勢威に押され続けて幾度ともなく遁走を繰り返した。戦に臨めば百戦百敗などと揶揄され、自分は到底項羽にはかなわないと何度も弱音を吐くものの、しかしその度に家臣に叱咤されて支えられ、艱難辛苦の末についに楚を破って大陸を再統一し、漢帝国の高祖となる。

●四面楚歌：劉邦（前漢を起こした）と天下を争う項羽（楚の將軍）の軍隊は垓下に砦を築きます。兵士の数は減り食糧も乏しく敵の兵がこの砦を幾重にも取り囲んでいます。夜になると劉邦軍の兵士が項羽の故郷、楚の歌を歌う声が聞こえてきます。項羽はこれを聞いて驚き「楚の人間はみな敵に寝返ってしまったのか」と嘆きました。楚の人間が楚の歌に囲まれるのですから、なぜ周囲がみな敵という意味になるのか不思議です。実は味方がみな寝返り、敵方に回って自分を包囲しているという話からできた故事成句なのです。

●“匹夫の勇”と“婦人の仁”：“匹夫の勇”とは、深く考えず、ただ血気にはやるだけの勇氣。思慮も分別も無い、腕力に頼るだけのつまらない勇氣。勢いませの小さな勇氣。血気にはやった目先の勇氣。「匹夫」は身分の卑しい男。また、道理をわきまえない男。“婦人の仁”とは、非常に小さな、取るに足りない情。女性は目の前の弱者を見ると不憫に想い涙し、思わず手を差し伸べてしまう優しさがあるのですが、いざ元気になった途端に冷たい態度をとり、その人物が活躍しても心から喜べない。実態の伴わない女子供の優しさ…。部下には優しいが、いざ恩賞となると出し惜しみする。という意味

●“国土無双”：“比類なき国土”の意味。“韓信”がこう呼ばれ称えられた故事に由来する成語である。紀元前200年ごろ、項羽と劉邦は力を合わせて秦を倒しました。このあと権威を握った項羽は、劉邦を漢中・巴蜀という辺鄙な場所の王に任命しました。そして、この場所は故郷からあまりにも遠かったため、將軍や兵士の多くが逃げ出してしまいました。それは、韓信も例外ではありませんでした。そんな中、丞相であった蕭何も逃げ出してしまった、という話を聞いた劉邦は怒るとともに悲しみます。しかし、蕭何は数日後に戻ってきました。これに劉邦は安堵するとともに怒り、「逃げたのではなかったのか」と問いかけると、蕭何は「逃げていたのではなく、逃げ出した韓信を追いかけたのだ」と答えます。そして、劉邦は「なぜほかの逃げ出した將軍は追いかけないのに、韓信だけは追いかけたのだ」と問います。すると、蕭何は「韓信は国土無双であり、ほかの將軍とは違います。劉邦がここにずっと留まるつもりなら韓信は必要ないが、ここを出て天下を争おうとするならば韓信は不可欠なのです」と答えたのです。その後、韓信は大活躍をし、劉邦が天下を取るのに大きな貢献をすることになります。

●“中国の三大悪女”：呂后、武則天（則天武后）、西太后 を言いますが、江清（毛沢東夫人）を加えて、“四大悪女”とも言われます。

●中国史：殷・周・春秋・戦国・秦・前漢・後漢・三国（呉・魏・蜀）・晋・隋・唐・宋・元・明・清・中華民国・中華人民共和国

※ 今回の卓話は難しく、記録者も勉強させられました。ネットで調べただけですが！